

SRID キャリア開発

国際開発研究者協会 (SRID: Society of Researchers for International Development) は、国際開発関連機関（国際機関、政府関係機関、NGOs、開発コンサルタント企業等）で働く事を希望する人達のキャリア開発を支援するため、カウンセリング、能力開発向上研修等の**キャリア開発事業**を実施しています。その一環として、キャリア開発事業受講生や国際開発関連機関への就職を目指す人達にキャリア開発に関する情報を提供するため、「SRID キャリア開発」を年2回、3月と9月に配信しています。国連機関、世界銀行(世銀、WB)、アジア開発銀行(アジ銀、ADB)、アフリカ開発銀行(AfDB)、欧州復興開発銀行(EBRD)、国際協力機構(JICA)、開発コンサルタント企業等の国際開発関連機関に勤務経験のあるSRID会員の知見とネットワークを活かし、SRIDならではの情報を発信しています。

第5号では元IMF・世銀合同開発委員会事務局長の小寺清SRID会員からの読者への特別メッセージ、本年2月に開発コンサルタントを経て、ナイロビの国連ハビタット(UN-Habitat)本部にJPOとして赴任した、高田雄輝SRID会員からのナイロビ通信、2024年1月13日及び20日に実施される、国際開発金融機関就職希望者のための国際プロフェッショナルコース(IDPC)のご案内を掲載しました。

読者への特別メッセージ: 複合危機、多極化、高速変化の時代に世界のどこかで価値の創出できる能力を身につける

「国際協力・開発援助事業」のプロを目指そうとする若い世代の方々へのメッセージを、「SRID キャリア開発編集部」にお願いされました。そこで、私自身が国際金融や開発に携わった1980年から現在までの40年余りの時代を振り返り、若い世代の皆さんが生きていくこれからの30~40年ぐらいを見渡して考えてみました。そうしますと、「国際協力・開発援助事業」という職業をより広い視点でとらえ直し、公的セクターでも民間企業でも、低所得国であれ、中所得国であれ、世界のどこかで人々に価値のある商品・サービスを提供し適度な収入を得るための経営力を身につけることが、今後は重要ではないかと考えるようになりました。

まさしく思うに、南北の「南」と分類されていた国々のGDP合計が世界のGDPの半分に近づき、やがて多数派になっていくなかで、「南」のなかでも途上国・新興国が多層化してきています。米国や欧米さらにG7中

心の世界秩序が、中国やインド・サウジなど新興国の発展により、多極化しつつあります。日本は、先進国の中で経済社会の停滞が著しい状態が続き、かなり内向きになってしまいました。気候変動・生物多様性保全といった、一国だけでなく世界全体で立ち向かわなければならないグローバル・パブリック・グッツの課題が、教科書上の問題ではなく喫緊の対応を要しています。さらに、デジタル化・AIの急速な発展により、仕事のあり方のみならず教育・社会・宗教・文化のあり方が根源的に問い直される局面にきています。官も民も政も学も、そしてメディアも、課題山積です。印象論ではありますが、課題に立ち向かうという観点から、国内で、私より10~20年ぐらい年下の今の50代、60代で早く退場した方がいいと見受けられる人は多いのですが、他方、20代、30代で「後生畏るべし」という人は少なからず存在し、まだ希望は持っています。

冒頭の問いに対してきちんと解を詳述するだけの力は持ち合わせていませんが、9月19日のSRID懇談会の最後に若い世代へのメッセージとして、①語学力の上達・維持を常に心がける、②経済情勢の理解は、まず、IMFのWorld Economic Outlook (WEO)と4条協議報告書の読み込みから、③世界の政治経済社会の今、



小寺 清 (こでら きよし)

旧大蔵省・財務省でほぼ一貫して国際畑を歩む。アフリカ開発銀行、在米大使館、米州開発公社、世界銀行、JICAに在籍。2006~2010年の間、日本人初の世銀・IMF合同開発委員会事務局長に就任。2016年以降は、国際NGOウォーターエイドジャパンの理事、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン理事、英国海外開発研究所上級客員研究員。SRID会員。

将来を考える上で、歴史の理解は、きわめて重要、と申し上げました。ここでは、私の開発・国際金融に特化したキャリア・パスを振り返りながら、私なりに、いつの時代にも国際人として必要とされるような「力」をどう獲得していくのか？ハウツー的なことも含め敷衍してみます。

留学試験に落第。英語は生涯オン・ザ・ジョブ・トレーニング。

中学時代から英語はよく出来る方だと思っていましたが、ひょっとしたら「受験英語」ができただけだったのかもしれない。大蔵省に入省して間もなく、同期27人中8人が留学するチャンスがあったのですが、留学試験にことごとく落ちてしまいました。にもかかわらず、数年後、1980年、海外勤務志望だった自分に回ってきたポストは、省内でもバリバリの国際派の先輩が配属されていたアフリカ開発銀行日本代表理事代行でした。29歳でコートジボアールに赴任し、不完全な英語と、生活圈と理事会の半分はフランス語という環境で、今振り返って自分のパフォーマンスは100点満点で40点ぐらいの出来だったと思います。

AfDB 加盟や AfDF (アフリカ開発基金) 増資交渉の基礎的な情報収集が仕事の中心でしたが、同じグループにいたサウジアラビア、オーストリア、アルゼンチン(日本の理事は当時、これらの国も代表していました。)への英語での報告はまともに書けませんでした。当時の大蔵省の大先輩からは、とにかく英作文をたくさん用

意し論理的な表現ができるようにとのアドバイスをいただきましたが、結局、これが実行できるようになったのは10年後でした。

その後のワシントン大使館時代は、大使館の中の省庁間のポリティックスへの対応と日本からの訓令の多さもあり、仕事の英語を上達させる機会はむしろ減ってしまいました。それでも、ありがたいことに、TV、映画、ラジオを通じて憧れだったアメリカ文化にどっぷりつかるとはできたし、米国は政府ではなく議会が物事を最終的に決めることを体で覚えられました。その後、本省国際金融局の5年間の補佐時代は、OECD(経済協力開発機構)やIMF(国際通貨基金)の事務局ペーパー、G5のカウンタパート(とりわけ米国)のポジションペーパーを読み対処方針を作る仕事が続きました。それでも、日本語の対処方針さえ作ればいいので、こなれた英語を書く必要はありませんでした。

転機その一は、40歳からの世銀の理事代理時代でした。マルチ(多国間交渉)の世界での自己主張は単純ではありません。黙っていれば存在を否定されますし、投票権第2位にふさわしい内容の発言が必要です。理事会では、訓令が来ないような案件では、事前に発言原稿を用意せず、他の理事たちの発言をその場で消化して自分の意見を加えて発言する、という訓練を何度も繰り返しました。当時の開発委員会に「直接投資の重要性」という小文をまとめて日本政府の貢献として提出したところ、それを後で知った本省の局長はびっくりしていました。こうしたことも重なってか、事務局

の幹部が私のことを日本人にしては「うるさい」存在と見てくれるようになったようです。

46歳からの世銀中央アジア局長時代は、転機その二です。局長の仕事で一番時間を費やし、苦勞したのは、自らの統率力の下で、職人気質の多国籍の専門家たちのチーム・ビルディングを行い、彼らの業績を管理することでした。部下の仕事がうまくいかなければ、責任を負うのはすべて幹部である自分です。予算は要求するものではなく、節約するもの。すなわち、予算の管理＝人材の管理＝仕事の説明責任なのです。当時、ウォルフェンソン総裁のイニシアティブで幹部用にハーバードの研修プログラムが設けられましたが、日々の仕事をこなすのに精一杯で研修に行く余裕はなし。大使館や理事室時代に比べ、年間の休暇の日数は3分の1ぐらいに減り、日曜日の午後は会議用の山のようなペーパーの読み込みでした。若い頃に留学された方々は経験済みかもしれませんが、私にとってはチャレンジまたチャレンジの連続でした。

50歳で本省の審議官に戻ってからは、世銀のオペレーションの内実は熟知していたので、国際会議では増資交渉でシェアダウンを図りながらも、世銀のみならず各MDB事務局の仕事の方向性の議論をリードする自信は付きました。ようやく「一人前」になりました。

その後、現在に至るまで、東京にいても、常に英語に浸かるように、Financial Times (FT)、Economistに目を通す生活習慣は普段着としてキープしています。

東京ではスカパーの英語パッケージで BBC、CNN は常に観られるようにし、朝のNHK BS1 の世界各国のニュースは文化の多様性を体感するため大体見えています。日本が埋没しないよう情報発信をしたいからです。お金がなくても、週刊 The Economist ぐらいはウェブベースでもいいので、英語のブラッシュアップに活用することを勧めます。

世界経済・各国経済の理解は、IMF の World Economic Outlook と個別国の 4 条協議報告書の読み込みから。公表データで多くのことがわかる時代になった。

日本やアジアには、1997 年のアジア通貨危機のトラウマから、IMF を忌避するインテリの方々が少なくありません。しかし、マクロ経済の運営をおろそかにすると債務問題が悪化し、民間投資が減少することは明らかです。IMF の処方箋が貧困層に厳しいという見方は今では時代遅れの認識です。例えば、歳出削減でも保健・教育予算は保護せよというのが今の IMF です。年 2 回春秋に発表される WEO は必ず目を通してください。世界の一流メディアは熟読しています。最近 IMF のアジア・太平洋事務所が便利な翻訳をウェブにのせています。

個別国については、4 条協議報告書は本文 30 頁ぐらいのわかりやすい英語で、数回のミッションをベースに当該国のマクロ経済の現状分析・構造的な課題を年 1 回公表してくれています。ワシントンで一緒にした後、重要な国の大使になった優秀な外務官僚の多くは、

4 条協議報告書ほどわかりやすい分析はないと言っていました。中国・インドのような大国については 2-3 年分をまとめて読むことを勧めます。

また、世銀の地域局の年 2 回の経済予測も各地域の開発課題をタイムリーに分析してくれています。世銀東京事務所のモーニングセミナーでは、著者たちが直接解説もしてくれています。ADB の年 2 回の Asian Development Outlook もマクロ経済予測に加え、時代の流れに即応したトピックスを特集しています。要すれば、この 10 年間で、大学院レベルの途上国経済に関する国際機関の「生の」講義が、オンラインベースでアクセスできる時代が到来しました。これを活用しない手はありません。

相手国と真摯な政策対話をするには、経済はもちろんのこと、political economy を十分理解し、ひるがえって、歴史、とりわけ世界史、文化、宗教を十分理解知る必要あり。

相手国の首脳・財務大臣・各省の大臣との政策対話では、誰が改革派か？の見極めが重要です。その際、相手国の経済のみならず政治情勢、歴史、文化、宗教を十分理解する必要があります。さらに「当該国」だけでなく、「地域」、「周辺国」の視点が重要であるとともに、その国を理事会で代表する国、さらには、当該国を取り巻く国際政治も理解する必要があります。

個別国の歴史を知る前提として、グローバルな近現代

史の理解が欠かせません。西洋中心の視点かもしれませんが、マーガレット・マクミラン「Paris 1919: Six Months That Changed the World」、邦訳「ピースメイカーズ」は、第一次大戦後の世界の誕生をめぐり、英米仏のパワーポリティクスから極東、中近東、東欧まで幅広く描かれていて面白かったです。また、「開発」の視点で「国家の統治の歴史」を古代中国から現代まで俯瞰したフランシス・フクヤマの「政治の起源」上・下(2013 年)、「政治の衰退」上・下(2018 年)は何度も読み返しています。翻訳版の方が中国史の固有名詞がわかりやすく読みやすいです。

さらに、歴史と科学の融合という視点では、ユヴァル・ノア・ハラリ「サピエンス全史」、「ホモ・デウス」が巨視的な視座を提供してくれます。また、帝国書院「最新世界史図説タペストリー」(高校生の教材!) を手元におき、各世紀の世界の勢力図はどうだったのか(「グローバル・ヒストリー」の可視化)を常に確認しています。

最後に、日本の近代化の歴史を開発研究と結び付ける動きに関しては、大野健一「途上国ニッポンの歩み」(2005 年)が、経済学者の分析として relevant な著作です。しかし、スコープを拡げ「日本の近代化経験を共有する」ことは外交の一環としては大いに意味があるかもしれませんが、「近代化」の歴史には朝鮮半島、中国大陸への進出・侵略という負の側面があることを、その世界史的位置づけを含め、重く受け止める必要があります。

開発コンサルタントから UN-HABITAT へ: Nairobi 通信

はじめに

三十代前半の、しかも国際開発キャリア序盤にあり、かつ国連ハビタット (UN-Habitat) に就職して間もない私が何を伝えることができるのかと少し悩みつつも、私の様に国際開発キャリアを目指す方々 (特に国連機関に興味がある方々) への情報提供と国際開発キャリアのプロモーションに加え、自己紹介を兼ねて、寄稿させていただきました。私は、現在 Junior Professional Officer (JPO) として任期付きの国連職員であり、私の国際開発キャリアもまさに始まったばかりですが、約7年間の開発コンサルタントとしての経験や UN-Habitat での仕事・現地生活について、比較的新鲜な感覚で、これまでの見聞をお伝えできればと思います。

国際開発のキャリアを歩むきっかけと UN-Habitat までの経緯

国際機関、殊に国連機関の、多国籍な同僚のキャリア

について伺うにつけても、多種多様なキャリア・パスがあり、国際機関でのキャリア形成を目指す上で正解や決まったルートはないと言えます。色々な業界・仕事を渡り歩きながらスキルを身に付けて国際機関にたどり着く方も多くいます。これは特に労働市場の流動性が高い欧米の方々に多いように思います。

私の場合、今までのキャリア・パスは「国際開発」と「インフラ・都市計画」の分野を専門軸として比較的じっくり実務経験を積んできたという特徴があると思います。まず、土木工学分野の修士課程を終えた後、別分野の民間セクター、もしくは公的部門で国際開発全般に関わる仕事の選択肢もある中で、専門性に重きを置いて開発分野のコンサルタントになるキャリアを選択しました。また、UN-Habitat へ入るまでの約7年間、開発コンサルタントとして一つの企業でインフラ開発・都市基盤整備に関わる計画分野に従事しました。

国際協力・開発援助のキャリアの選択

大学生の時には「何か国際的なテーマ」と大まかな関心のもと、発展途上国の都市化やインフラ整備を扱うコースを中心に学部と修士の研究に取り組みました。国際協力・開発援助の道を選んだきっかけはインター

ン経験でした。修士1年生の時に、当時特別講師として大学にいらしていた鈴木博明先生の大きなお力添えもあり、世界銀行グループでインターンをさせて頂く機会がありました。そこで多様な国籍や文化的なバックグラウンドを持つ人たちと仕事をする面白さ、専門家同士の議論から生まれる知的刺激を味わう機会を得ました。世界の人々の貧困撲滅・持続的な発展という共通の大きな使命に向けて、ドナーと途上国政府に限らず民間やアカデミアを含めた様々なプレイヤーが繋がり、一緒になって取組んでいる国際協力の現場を初めて体験しました。この経験を通じて、私も国際協力の道を進み、そこで経験を積み専門性を研鑽しつつ国際社会の役に立つことを自分の生きがいとしたいと考えるようになりました。

この他にも、国際協力機構 (JICA) や開発コンサルタント企業でのインターン経験を通して、国際協力のコミュニティにおけるプレイヤー (国際機関、政府・政府関係機関、民間、NGO 等) の役割に関する理解を深めました。さらに、自分の関心や適性を考えた結果、発展途上国の現場で、専攻である土木工学を軸に、実務を通して開発援助に貢献したいという想いから、修士卒業後にインフラ分野の開発コンサルタント業界に従事することを決めました。

開発コンサルタントの経験と UN-Habitat への転職

私は大学院出の新卒として入社してから 2023 年 2 月までの約7年間、交通・都市計画分野のコンサルタントとして、途上国の都市インフラや交通・物流に関



高田雄輝(たかだ ゆうき)

2016 年東京大学工学系研究科社会基盤学専攻修了。同年、建設コンサルタントであるパシフィックコンサルタンツ(株)に入社、国際事業部門にて交通・都市計画を担当。2023 年より JPO 制度にて国連ハビタット (UN-Habitat) にて都市交通の Associate Expert に着任。技術士 (建設部門: 都市および地方計画)。SRID 会員

する計画の策定に関する調査・分析業務や、政府及び関係機関の能力向上に向けた技術協力の業務に携わりました。開発コンサルタントの業務は、データ収集・分析、技術提案、報告書作成を含む資料作成、ワークショップやイベントの企画・運営、発注者・カウンターパート機関との日々の調整、プロジェクト管理に関する各種ロジ関係の調整などなど、とても多岐にわたります。中にはとすると泥臭く、地道な作業の積み重ねが必要な場面もありますが、途上国の現場で現地関係者の人たちと一緒にあって実際の問題に取り組みながら、生きた知見を学べるところに醍醐味があるように思います。私は主にミャンマー、カンボジア、タイ、ヨルダン、タンザニアなどの国々で、インフラ計画、公共交通、スマート・シティ、物流・産業開発という幅広いテーマのプロジェクトに携わる中で、どの国・プロジェクトも新鮮な学びがあり、あつという間の7年弱だった印象があります。

国際機関への挑戦は、学生時代から憧れや関心があり、都市の持続性や格差などの課題に対してより上流かつグローバルなレベル・立場に関わりたいという想いから、30歳を迎えたあたりから情報収集や応募をし始めました。しかし、国連JPO制度を通してUN-Habitatへのオファーを頂いた際には、正直なところ、受けるべきか否かで少し躊躇いもありました。コンサルタントとして7年目を迎えて、自分で育ててきたプロジェクトなどもでき、ようやく技術的に面白い部分やプロジェクト・マネジメントの一端を担うことができるようになったところで、それまで積み重ねていたものを

手放すことが惜しいという気持ちや、もう少しコンサルタントを続けた方が業務遂行能力や専門性の面でも長い目で見たときに良いのではないか、という思いがあったからです。しかし、家族を含む周囲の後押しや「チャンスの神様は前髪しかないの、来た時にしっかり掴むようにしなさい」という恩師の言葉を思い出し、思い切って新天地での新しい挑戦に挑むことにしました。

UN-Habitat 1年生としての報告

UN-Habitatは都市の住宅・住環境や都市化の課題に取り組む国連機関であり、私はケニアのナイロビの本部にてUrban Mobility Associate Expertとして、途上国都市の持続的かつ包摂的な交通の実現に向けて、政策、計画、技術面での支援やアドボカシー活動、能力強化にかかわるプログラムの実施を担っております。国連機関は組織によって全く動き方の特徴が異なるようですが、UN-Habitatは国連機関の中でも専門へ特化しつつ（テクニカルなスタッフの割合が比較的高く、都市計画に関連する専門性を持つ人が多い）、FieldとNormativeの両方のオペレーションを有している（実地での具体プロジェクトを展開する一方で、政策やガイドライン策定、シンクタンク的な研究活動も実施する）うえに、プログラムベースの傾向が強い（定型的な業務が少なく、プログラムに活動や人員等が紐づく）というような特徴があると言えます。開発コンサルタント時代の業務と重なる部分はいくらかあると感じております。例えば、データ収集や分析、報告書や技術提案書の作成、プレゼン資料の作成や発表はコンサ

ルタント時代の経験を生かしますし、何度か都市・交通計画分野でセミナーやレクチャーでの発表を依頼されることがあったのですが、コンサルタントの時の知見や経験が役に立っております。一方で、プロジェクトの立上げやマネジメント、パートナー・リレーションシップ・マネジメントなど、これまであまり経験のなかったことを任されることもあり、これらは新しいチャレンジとして手探りをしながら試行錯誤で進めているところです。

ワーク・スタイルの側面でいうと、UN-Habitatは欧米的な組織に典型的な、成果主義・個人主義が底流にある（システムに組み込まれている）一方で、ケニアの文化要素もあつてか、どこか気楽でフレンドリーな雰囲気があると感じています。また私の所属するチームは、ヨーロッパ出身の方が多く、上司・部下やコンサルタント、インターンなど分け隔てなく、かなりフラットにコミュニケーションをとることが、日本の組織文化にどっぷりと浸かり、かつ大半の海外プロジェクトが東南アジアの国々だった私にとっては新鮮な点です。



UN-Habitat のオフィス

ナイロビは赤道付近に位置しますが、標高が高いため年中温暖で過ごしやすい気候であり、街中でも多様な樹木、可憐な花々、カラフルな鳥を見ることができません。緑豊かな森林や緑地がモザイク状に点在する中、日系企業を含む多くの国際企業が拠点を置くアフリカ有数のコスモポリスらしく高いビルが林立し、グローバルな小売企業が入居する大型のショッピング・モールなどが並ぶ街区のすぐ傍らに、長屋やバラックが密集する街区があったり、とても動的かつ複雑な都市システムに生活の中で接することができるのはとても興味深い体験です。また、ナイロビは信頼できる公共交通機関がなく毎日の通勤にUber Taxi を利用せざるを得ないことが都市交通担当として大変後ろめたいところですが、陽気で話好きなUber Taxi のドライバーに日本文化や政治経済、さらに彼らの大きな関心事である自動車に関して質問攻めにされる中で、転じて日本のシステムに関して気づきを得ることもあります。(余談ですが、ケニアの道路は日本からの中古車で溢れており、Uber Taxi に乗りながらナビの言語設定を変更してあげたり、時折ナビから流れてくる日本語の指示の意味を教えてあげたり、これまで何度やったか数え切れません！)

これまで UN-Habitat での仕事や雰囲気に関してやや客観的に平たく所感を述べ、また UN-Habitat へ転職する際に少し迷いがあったことは先に触れた通りですが、これまでとても充実した日々を過ごすことができていることを、あえて強調したいと思います。UN-Habitat で私が取り組んでいるテーマである都市交通

は、いま持続可能な都市の実現に向けて重要な岐路に立っており、複雑で緊急な課題であると同時に、前例のないほどの認知、コミットメント、国際的な協力が集まり、革新的なアイデアが積極的に創出されているエキサイティングな変革の時期にあり、そんなタイミングでここにこられたことは大変幸運なことであると考えております。私が UN-Habitat を通してどのような貢献ができるかは手探りで模索しているところですが、この機会を自分にとっても意義のあるものにするべく努めたいと思っております。

国際機関を目指している方々へのメッセージ

国際開発キャリア序盤かつ国連ハビタットにJP0として就職して間もない立場なのでアドバイスなど仰々しいことを書くつもりはなく、最近の気づきや体験から二点お伝えしたいと思います。それは、国際開発の裾野は意外と広いこと、またその一方で逆説的に、国際開発に携わる人たちのコミュニティは繋がりが密で意外と狭いということです。

まず一点目ですが、私はケニアに移り住んでから、改めて国際開発において民間ビジネスやNGOや市民コミュニティの役割が重要になってきていることを感じます。例えば、主にインフラ整備において、民間の資本やノウハウを取り入れる官民連携のアプローチが途上国のインフラ整備において導入されてから久しいですし、ICTの分野でも、例えば、ケニアのモバイル決済システムを席卷しているM-Pesaが銀行口座を持たない人々にも金融サービスを提供する手段とな

り、金融包摂に寄与したのは有名な事例です。また、UN-Habitatでは公共スペースの設計において住民参加によるCo-development(共創)を促すツールとして、ゲーム・コミュニティと連携し、子供にも人気のゲームMinecraft(ブロックを積み上げたりして構造物を製作することができます)を導入し、ゲーム空間上で公共スペースのデザインを試行したり展示するなどしています。これらの例が示すように、国際協力・開発援助の分野は公的なセクターだけでなく、ビジネス、市民やコミュニティなどの多様な主体の関与があり、近年のデジタル技術の発展とそれによるビジネス・モデルの革新を通じて、国際協力においてますます民間セクターの裾野が拡大し、伝統的には国際開発にあまり関与がなかった業界・事業者との接点を持つ機会が多くなっていると考えております。

次に、二点目ですが、つくづく国際開発のコミュニティはとても不思議で面白い縁で色々な人が繋がっている、と感じます。つい先日参加したカンファレンスで全く偶然に前職のカウンターパート機関でお世話になっていた人に出会ったり、ケニアに来てから知り合ったと思っていた方が実は私が学生の時に全く違う国でお世話になった方だと判明したり、業務と関係するような研究をみつけて原典をたどるとよく知っている先輩が関与している研究だったり。このように、国際協力・開発支援のキャリアを歩む中で、(必ずしも伝統的に国際協力・開発援助を担っていた公的セクターや業界に限らず、多様な業界の)様々な人と知り合う機会、偶然の再開の機会が無数にあるように思いま

す。そして国際協力・開発支援のコミュニティの良いところは、(同業とのちょっとしたライバル関係などはあるものの) 大局的には途上国の人々のため、あるいは社会課題の解決のため同じ方向を向いて進むことができる場所だと思います。またひょっとするとそれがプロジェクトやビジネス、あるいはキャリアの手助けになったりすることもあるかもしれません。私自身もこの記事をごここまで読んでくださった方と、どこかでご一緒できることを楽しみにしております。

高田雄輝

国際開発金融機関志望者のための国際開発プロフェッショナル・コース (IDPC) 開催 (2024年1月13日及び20日) のお知らせ

SRID は国際機関で働くことを希望している人達を対象に、国連機関や世界銀行等の国際機関はどのような役割・機能を果たしているか、また国際機関に入り働くために必要な能力をどのように手に入れたらいいかを、学んでもらうことを目的とした国際開発プロフェッショナル・コース (International Development Professional Course, IDPC) を開催し、受講者から高い評価を得ています。昨年12月に開催したIDPCの報告書については、[SRID キャリア開発第4号](#)をご覧ください。

SRID は2024年1月13日(土)と1月20日(土)に

国際開発金融機関 (Multilateral Development Banks - MDBs) への就職に焦点を当てた IDPC を英語で、Zoom を使用して開催いたします。

このコースでは、まず、コロナ禍、気候変動、債務問題、ウクライナ戦争に端を発した食糧・エネルギー危機などの複合危機の下で国際開発金融機関の役割等を大きな開発の視点から概観し議論します。それに続き、どの国際開発金融機関の業務でも重要と考えられる、開発途上国の国別開発戦略とプログラムの策定方法及びプロジェクト・サイクル (発掘、形成、審査、実施、評価) の管理手法の理論と実践 (実際のプログラムやプロジェクトを使用したケーススタディー) を、国際開発金融機関においてそれらの実務を経験した講師によるレクチャーと演習形式で行います。これらの実務研修に加え、世界銀行、アジア開発銀行、欧州復興開発銀行等の人事部門の協力を得て、各国際開発金融機関の採用およびキャリア形成制度の説明と人事専門家による疑似インタビューが行われます。さらに当コースには、これまでの IDPC 受講者の評価が高かった国際機関の現役職員との Q&A セッションも含まれます。IDPC コース概要及び募集要項は、SRID ホームページのキャリア開発ページに10月上旬に掲載いたしますので、奮って IDPC へご応募・ご参加ください。

編集後記

7月20日、21日に Delhi で行われた、都市交通のワ

ークショップに参加してきました。世銀から出版した書籍で紹介した、公共交通と土地開発を融合させる公共交通指向型開発 (Transit-Oriented Development, TOD) を Delhi 首都圏の郊外鉄道沿線で実施中であり、その実施状況を検討するのがその目的でした。初めて、インドに出張したのは、1977年で、そのころは、路上で寝ている人が一杯いました。今や、眠る巨象は目覚め、インドは飛躍の時を迎えています。街のあちらこちらで、G20 準備の工事が行われており、貧しい人ですら、その表情が明るいように感じました。



開通間近の Delhi 首都圏の郊外鉄道に試乗

これは、NCRTC という鉄道会社の人達と一緒に撮った写真です。車輛はインド製で、社員の自信に満ちた明るい笑顔が印象に残りました。ワークショップを終え、ワシントン DC に戻ってきたら、インドの無人探査機が月の南極に着陸したニュースが流れていました。世界は凄いスピードで変わっていきます。

(鈴木博明 SRID キャリア開発事業運営委員長)